



シマウマ：関

わいるどらいふ

Wildlife

No.58

2026年1月31日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research

2025年度アカウミガメ調査報告

令和7年のアカウミガメの調査を集計して報告します。今年度の調査結果を宮崎市の白浜海岸から高鍋町の堀之内海岸までの総計を月別に下記のとおり表に示しました。また、2025年度の孵化率も食害が無かった375例の孵化調査結果を表に示しました。

2025年の上陸回数は856回と昨年の814回より増加し、産卵回数も増加しました。産卵回数が上陸回数に締める割合の産卵率も63%と昨年ほど(65%)ではないものの高い値となりました。本年の特徴として、上陸も産卵も7月に集中したことです。過去において、6月と7月に等しく多く上陸していましたが、本年は7月に集中して全体の半数を超える回数でした。また、昨年と月別に比較すると7月以外のすべての月で大きく減少しているのに対し7月だけは倍増していました。これは、これまでに例が無かったように思います。

本年の孵化調査は、流出や未発見のものを除き435卵巣について調査することができました。卵の露出などのために移植した3卵巣のうち孵化調査した2卵巣と野生動物に因る被害のあった58卵巣を除いた卵巣の孵化調査をした結果を下記の表に示しました。孵化率は59%と通年の約70%より低かったですが、高温が原因と思われ極端に低かった昨年(35%)より高い値となりました。本年の前半では、順調なふ化をしているとの報告でしたが、後半になり高温が続くようになり減少してしまいました。

一方、海岸の砂浜の状況は、国交省の養浜の工事が近年の自然現象で大雨が頻繁に降ることによるのか、砂が河川から海へ流れ込む影響と思われる砂の堆積が顕著にみられるようになりました。ただ、まだまだ以前の砂浜には程遠い様です。

(出口 智久)

2025年アカウミガメ上陸産卵等調査報告結果

月別	上陸回数	産卵回数	戻り回数	移植巣数	移植卵数	標識数	漂着死体	上陸前年比	前年上陸数	上陸日時
4月	0	0	0	0	0	0	0	▲ 1	1	初上陸日 5/15
5月	43	26	17	0	0	0	0	▲ 34	77	初産卵日 5/15
6月	250	182	68	2	213	20	1	▲ 57	307	
7月	490	288	202	1	134	26	1	208	282	
8月	73	47	26	0	0	1	0	▲ 74	147	終上陸日 8/25
合計	856	543	313	3	347	47	2	42	814	終産卵日 8/25

2025年ふ化調査結果(無野生動物被害自然ふ化)

産卵確認日	卵数	孵化個体数			孵化卵殻	pip死卵数	未孵化卵数	食害	卵底(cm)	ネットの設置率	帰海率	孵化率
		脱出個体数	救出個体数	死亡個体数								
最大値	183	163	45	49	163	48	150	0	96		100%	100%
最小値	5	0	0	0	0	0	0	0	37		0%	0%
平均値	115	65	1.7	1.8	68	1.9	45	0	54	74%	58%	59%

第36回 日本ウミガメ会議参加報告

Wila(宮崎大学野生動物研究会)は2025年11月28日から30日にかけて、徳島県美波町(旧日和佐町)で開催された第36回日本ウミガメ会議に参加しましたので、その報告をさせていただきます。宮崎野生動物研究会からは、宮崎市や新富町から6名、保田先生そして18名のWilaの学生が参加しました(図1)。



図1 本会議に参加した保田先生とWila部員

美波町での日本ウミガメ会議の開催は1994年以来2回目で、同町は1950年に地元中学生がアカウミガメの解体を目にしたことをきっかけに上陸産卵調査や人工孵化などの保護活動が行われてきた地域です。これらの活動は、アカウミガメの産卵地として日本初の国指定天然記念物への登録や、ウミガメ監視員制度、保護条例の制定など現在の保全活動の礎となっています。また、1985年に開館した「日和佐ウミガメ博物館カレッタ」は2025年に40周年を迎え、美波町はウミガメに関する多くの歴史と情報を有する「ウミガメの聖地」として知られています(図2)。



図2 大浜海岸に設置されたウミガメの看板

今回の会議で、Wilaからは1題のポスター発表を行いました。題目は、「波・植生がアカウミガメ産卵巣の砂中温度および孵化率に及ぼす影響」です。昨年の宮崎大会では、産卵巣内の砂中温度測定結果から、波や植生による暑熱の緩和が孵化率向上に寄与する可能性について報告しました。本年はその結果を踏まえ、波・植生・深度が砂中温度および孵化率に及ぼす影響について、より詳細な砂中温度測定および解析を行いました。

まず、各要因が単独で砂中温度に及ぼす影響を明らかにするため、産卵巣の存在しない地中に温度ロガーを埋設し、孵化率が大きく低下するとされる33℃以上の砂中温度を記録した累積時間を比較しました。その結果、波の影響を受ける波A群および波B群、植生の影響を受ける植生群では高温の累積時間が短く、また深度55cmでは35cmに比べて暑熱がより緩和されることが確認されました(図3, 4)。

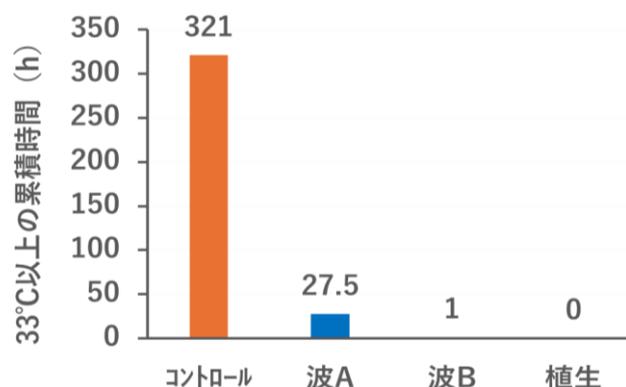


図3 波と植生が砂中温度に及ぼす影響

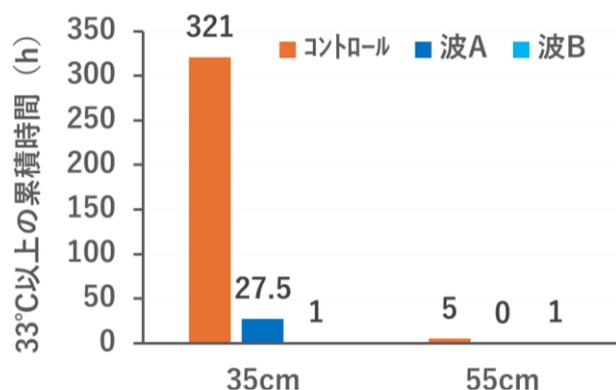


図4 深度が砂中温度に及ぼす影響

さらに、実際の産卵巣を対象に重回帰分析を行った結果、「標高」「標高と汀線距離の交互作用」、および「産卵巣周辺の植生の有無」が、孵化率に有意な影響を及ぼすことが示されました。このことから、低標高地点では水没により孵化率が低下する一方、汀線距離が一定以上になると水没を免れ孵化率が上昇すること、高標高地点では水没のリスクは低下するものの、汀線距離が一定以上になると暑熱の蓄積により孵化率が低下する可能性が示唆されました。また、植生は高温環境における暑熱を緩和し、孵化率低下を抑制していると考えられました(図5)。

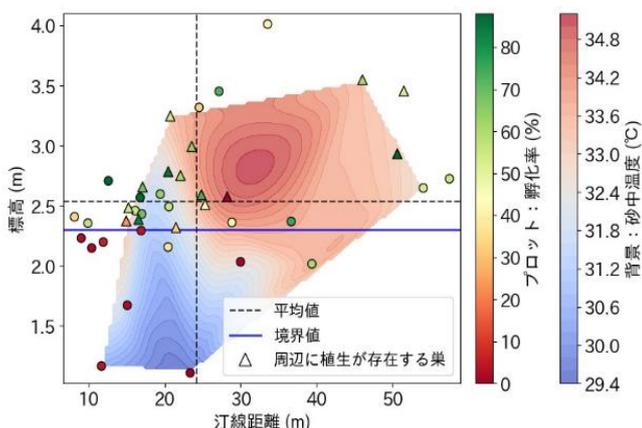


図5 平均砂中温度と孵化率の関係

ポスター発表では、全国のウミガメに関わる方々と様々な意見交換を行いました。その中でいただきました多くのご意見を、今後の研究に積極的に活かしていきたいと考えております(図6)。

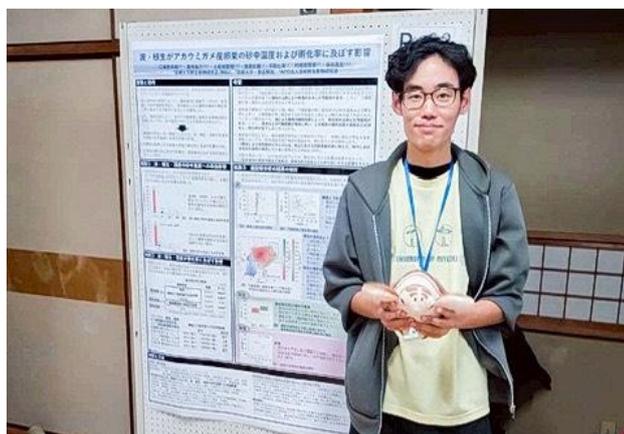


図6 ポスター発表を担当してくれた海野さん

大会期間中には、研究発表以外にも、エクスカーションとしての博物館見学、前夜祭、懇親会など様々なイベントがありました。Wila は残念ながらエクスカーションには移動の都合で参加できませんでしたが、前夜祭には無事参加することができました。ウミガメに関わる多くの方とお話しし、同年に実施された学生ウミガメ会議で知り合った方とも再会するなど、有意義な時間となりました。また参加者は無料で博物館を見学することができ、休憩時には博物館や、お遍路の23番札所である薬王寺を訪れるなど、美波町観光を満喫しました。特に博物館では、年齢が判明しているアカウミガメとして世界最高齢とされる75歳の「浜太郎」を間近で見ることができ、その迫力が強く印象に残りました。

(図7)



図7 博物館で飼育されている75歳の浜太郎

本年は徳島県での開催で、片道約10時間の長距離移動となりましたが、全国のウミガメ関係者の方と交流できたことは、とても貴重な経験となりました。来年は岩手県釜石町での開催が決定しており、日本ウミガメ会議としては初の東北地方開催となります。1年後に再び皆様とお会いし、ウミガメを学べる機会を心待ちにしております。

(廣瀬志織)

ブッポウソウに出会って

楽しみな出会い

5月から7月になると楽しみにしていることがあります。それは、夏鳥として訪れてくるブッポウソウという鳥です。

出会いは、30年以上も前になります。動物園に傷病鳥獣として運び込まれた野鳥でした。日本の鳥とは思えないような濃紺の深い美しい色合いと翼に輝く薄水色をした斑紋が目を引きました。くちばしが赤くなんとも艶があることにも魅力を感じていました。大きさはドバトよりやや小型ではあるものの体格はしっかりしているようでした。ブッポウソウの種名は同じ時期に飛来する「ブッポウソウ」と鳴くコノハズクと間違えられていたことを小学校の教科書で紹介されていたので知っておりました。この個体は、残念ながら、羽を骨折しており死亡してしまいました。この当時は野生でも宮崎県内では多数生息しており、野鳥の研究者に観察に適した数か所のポイントを紹介して頂きました。

ブッポウソウは、飛行しながら虫などを捕まえる飛翔能力を持ち、繁殖は山中の木の洞を利用しますが、宮崎では一般的に橋桁で繁殖することを教えて頂いて、飛び回るブッポウソウとの出会い感動したものでした。

ブッポウソウに会いたい

昨年、これまで出会いを楽しみにしていたブッポウソウが営巣地の橋桁を工事しているために来ておらず、ドバトしかいなかったため、落胆していたところ、野鳥の調査員から宮崎県内の観察に適した場所を紹介して頂きました。

5月になって、その場所にブッポウソウが飛来してきていることを聞きました。繁殖をしている営巣場所から川を挟んで十分な距離が離れていて、ブッポウソウは私たちが観ていても気にしていないことも確認しました。



ブッポウソウに再会

2025年5月12日、午前8時頃、観察地点に到着しました。まだ、ブッポウソウの姿は見えませんでした。橋桁には、10数羽のドバトと営巣をしているムクドリが陣取っていました。

以前、ブッポウソウが居なくなる原因としてドバトなどの存在があると聞いたことがありました。

ここでも繁殖は難しいのだろうと思っていました。それでも、この地にはカワセミやヒヨドリ、ヤマガラ、そして、ヤマセミなどが姿を現していました。川の中では、宮崎市内では見ることが少なくなった両生類のアカハライモリなどもいて、観察を楽しんでいました。

それから1時間くらいした午前9時頃、一緒に行っていたひとりが「あ、ブッポウソウだ!!」、それまで、トビが止まっていた電線の方に双眼鏡を向けていました。私たちも大慌てで、双眼鏡を向けると、2年ぶりのブッポウソウでした。



ブッポウソウの繁殖行動

観察しているとすぐに橋桁に近い梢に移動して陣取りました。その場所は、ブッポウソウが止まりやすい定位置の様でした。



すぐに、鳴き交わしが始まりました。

やがて、1羽がいなくなり、くちばしに何やら、くわえてきて、プレゼントを始めました。



一連の繁殖行動を観察することができました。プレゼントを贈ると、オスらしき個体が雌らしき個体の背に乗り交尾をしました。



思わぬ観察

繁殖の一連を観察した私たちが更に驚かしたのが、交尾が終わると、1羽がいきなり、橋桁の方にすごい勢いで、突っ込んで行きました。

すると、ドバトが一斉に飛び立ちました。羽数も体格の大きなドバトが慌てたように飛び立ち、数回のブッポウソウが攻撃にドバトたちはあっけなく飛び去ってしまいました。

それでも、ムクドリたちは抵抗しているのか飛び去ろうとはしませんでした。時折、巢材であったであろう枯れ枝や枯れ草が落ちていました。

そして、ブッポウソウはムクドリと絡み合うようにして、橋桁から川の直前まで落ちていきました。ムクドリも飛び去って行きました。



これまで、ブッポウソウがドバトなどに追い出されていたと思っていましたが、ブッポウソウの飛翔能力や攻撃力は他の鳥類の比ではないようです。では一体何がブッポウソウの生息数を少なくしているのでしょうか。今後もブッポウソウの邪魔にならないように見守りたいと思います。

(出口 智久)

追悼



斎藤政美さんへ

斎藤さんと初めて親しく話したのは何時だったか覚えていない。気が付けば話の出来る飲み友達だった。

カモシカ調査では、いつも最後まで残り、二人で良く話していた。会話の内容が合って夜中まで話し続けたのは、我々学者もどきがいろいろな分野で調査し研究しているが、誰もそれらの内容を殆ど発表しない。否、発表する場がない。これを何とか解決できないか話し込んで飲み、話は終わらない。最後は岩本隊長が起きて来られ、

「明日も朝が早いから早く寝なさい」と叱られて渋々床に就くという、カモシカ調査ではいつものパターンであった。

それから斎藤氏が県立博物館に移られてからしばらくした2012年にいろいろな宮崎の自然を研究している方々の発表の場として「宮崎の自然合同研究発表会」を立ち上げられた。

次はそれを報告文してまとめて印刷することはできないか、やはり斎藤氏と飲酒談合、岩本先生にも事ある毎に話して漸く2016年「宮崎の自然と環境」が出来上がった。

2024年3月の飲み方の時に、アジア一周の一人旅をしてみると、旅行中に飲む焼酎を如何にして持ち込むか目を細めながら思案する姿が目に焼き付いている。それから2カ月後に舌癌が見つかり、手術をされた。言葉が出なくても筆談でいろいろな会合に参加され、体調もよさそうだったので全快を楽しみにしていた矢先に訃報が飛び込み、ショックを覚えた。仲のいい友達が同じ年に相次いで亡くなった。

この他旅行にまつわる話はまだある。斎藤氏が定年退職したら児玉さんを交えて3人で小笠原に行こうとなっていた。ところが児玉さんの急逝により断

念となった。この時も宮崎にない植物を直に見たいということだった。

また酒にまつわる武勇伝は数々ある。自宅で焼酎を飲み、2次会と称して自室でワインを飲むんだそう、時には机から布団まで辿り着かず、途中で轟沈してしまうこともしばしば。また原稿を書きながら飲み、朝になったら夜の原稿の書き直しが待っていることも度々だったそうな……。それでも肝機能検査で異常が出たことはないと自慢していた。とにかく酒に浸り酒を浴び、酒の好きな人生を楽しんでいたような……。

斎藤さんの文章は読みやすく分かりやすかった。人を引き付けるような文章だった。宮崎の自然と環境に書かれた植物の話は好きだった。あの文章が気に入って宮崎の自然と環境を購読し始めた人を何名か知っている。それほど人を引き付ける文章だった。再度彼の新しい文章を読んでみたい。

今度は天国で心行くまで飲んでください。カンパイ! 俺は酔っぱらったぞ……。

心からご冥福をお祈りします。

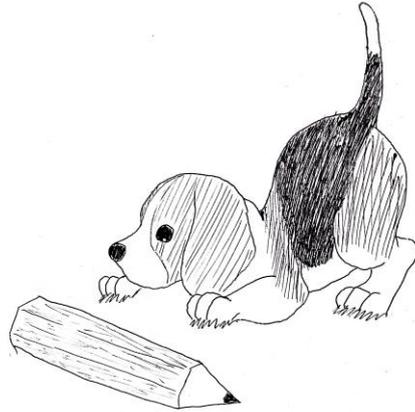
(中村 豊)

追悼



末吉豊文さんへ

末吉さんが昨年3月28日逝去されました。末吉さんは宮崎大学教育学部特設理科課程の卒業生で、卒業論文を私の研究室で書きました。動物の生態に興味があったらしく、大学2年の後半から私の研究室に出入りしていました。あまり目立った学生ではありませんでしたが、よく話すときと話さないときの差が大きかった気がします。これは社会に出てからもずっと続きました。多分、寡黙なときは周りをよく観察していた時期だったと思います。すなわち、



佐賀 真由美

宮崎県総合博物館で解説員をしている佐賀です。

私は西都市で狩猟をしています。私のグループでは冬の狩猟は、勢子（猟犬を使うリーダー）とマブシ（待ち伏せをする猟師）で行います。まず勢子が山に数匹の猟犬を放ち獲物を追わせます。犬にはGPSが付いているので走っている方向にマブシがいれば無線で連絡が入ります。冬の寒い山の中で何時間待っても何にも獲物が来ないことは普通でそんな時、はぐれた猟犬が来てくれると嬉しくなります。一度山で道に迷ったことがあります。猟犬がフッと横切りました。「ケンちゃん一緒に帰ろう！」って呼んだらしっぽをブンブン振って駆け寄ってくれました。なぜウロウロしていたのか不思議でしたが助かったという安堵の気持ちで一杯でした。後で分かったことですがケンちゃんは鉄砲で撃ったあと獲物の足にかぶりつき大切な肉を少々いただいて逃げている途中だったのです。私の後ろに隠れていたケンちゃんは誰からも怒られませんでした。お互い助け合った一日でした。

次は博物館の米村彰先生をお願いします。

彼の新しい興味の対象の枠組みを、心の中でじっくり造形していたのだろうと、私は理解していました。

卒論テーマは「加江田川河口における鳥類相の季節的消長」だった気がします（卒論は、基本的に皆に戻しましたので、正確な題目は分かりません）。私は鳥の専門家ではないのでこのテーマでは満足な指導はできないと伝えたのですが、頑として彼は聴きませんでした。従って、自分で研究計画を立て、自分で川へ出かけ、鳥を見分け、行動観察を続けていたと思います。卒論が出来上がって、「何、これ全部自分で調べたの?」と、その出来のすばらしさに驚いたものです。

卒業後に中学校の教師となった後も、時々大学に寄ってくれ、自分が今何をしているかを話してくれました。彼がもっとも自分らしい生活を送れたのは西米良中学校勤務時代だと思います。何しろ、放課後になると何もする仕事がないので、毎日学校そばの一ツ瀬川に降りて一人で釣り三昧を楽しんだと言っていました。彼は、本当はこのような生活を一生続けたかったのではないのでしょうか。しかし、年数が経つにつれて学校の責任ある立場に立つようになり、様々な雑用をこなさなければならないようになると、精神的にも、結構つらい時代を過ごさなければならなかったようです。

それを開放してくれたのが、県立総合博物館、教育委員会文化財課の自然系担当者として勤務し始めた時だと思います。博物館では南谷先生から両生・爬虫類の専門家になって欲しいと依頼を受け、結局、その後逝去するまで、サンショウオ類の研究をつづけました。また、カモシカやウミガメなどの担当ともなり、私とのつながりも増えてきて頻繁に連絡を取るようになりました。退職後は、ヤモリ、オオイタサンショウオ（後にミヤザキサンショウオ）やソボサンショウオなどの調査を精力的に続け、とくに「ミヤザキサンショウオとその調査・研究史」という総説記事をものにすることができました。また、亡くなる間際にはすべての調査データをまとめたファイルを私に残してくれ、RDB 委員会の後任の研究担当まで推薦してくれました。最後まで、きちんとした仕事を済ませ、末吉さんらしい自分の整理を終えて亡くなった末吉さんに心より「有難う！お疲れさん」と伝えます。

（岩本 俊孝）

動物記録

2025年

- 5/15 明神山海岸で県内本年初のアカウミガメ産卵を確認
- 6/10 ニホンカモシカが美郷町で発見され、保護、死亡（当研究会協力）
- 7/21 ニホンカモシカが日之影町で発見され、保護、死亡（当研究会協力）
- 7月 コアジサシが昨年に続き・100羽以上飛来し繁殖
- 12月 野生イノシシの豚熱感染 46例まで拡大

野生研のあしあと

2025年

- 3/8 「宮崎の自然」合同研究発表会にて研究会員発表
- 3/17 当研究会3月度月例会
- 3/26 宮崎県中部流砂系検討委員会に会員参加
- 4/7 宮崎海岸の施工について、国交省宮崎河川国道事務所宮崎出張所の依頼にて協議に参加
- 4/19 宮崎海岸市民談義所に参加
- 4/21 4月度月例会開催
- 4/24 令和7年度アカウミガメ連絡協議会の開催をサポート
宮崎県文化財課主催で県指定天然記念物のアカウミガメの保全活動に役立てようと、保護団体や産卵地域の行政職員らの連絡協議会が開かれた
会員が講師を務める。
- 5/1 ペットワールド学生にウミガメ講義
(講師派遣)
- 5/14 日本ウミガメ協議会より環境モニ1000協力依頼
- 5/16 宮崎県文化財課へ石崎浜利活用に係る情報提供

野生研のあしあと

- 5/18 令和7年度理事会ならびに総会
本年のアカウミガメ調査の準備
- 5/20 アカウミガメ一斉調査を開始
- 5/25 酪農大学との共同研究開始
(衛星を利用して地温の推測等)
- 6/14 宮崎海岸市民談義所に参加
- 6/15 日南市の上陸産卵調査結果へ助言
- 6/16 6月度月例会（リモート会議）
- 6/25 宮崎市文化財課の依頼により宮崎南警察署に協力（ウミガメの関係）
- 6/27 宮崎河川国道事務所のウミガメ学習会に協力
- 7/8 JALの広報の取材の対応（新富南海岸）
- 7/12 広瀬北小学校区地域づくり協議会ウミガメ保全教室協力（講師派遣）
- 7/14 宮崎県の依頼によりテレビ宮崎のアカウミガメにかかわる問合せに対応
- 7/21 7月度月例会
- 7/30 カムチャッカ半島地震により津波警報・注意報が発令のため調査を中止とする。
- 8/5 日向市お倉ヶ浜のスポーツイベントに伴う工事の協議協力（県文化財課）
- 8/10 アカウミガメの一斉調査終了
- 8/24 延岡市子育て世代の人についての講演会
(講師派遣)
- 9/2 宮崎海岸市民談義所参加
- 5月～8月 新富南海岸にて夜間観察会を実施
- 8月～10月 孵化調査を実施
- 11/9 九州産ニホンカモシカの保全打合せ（熊本、大分、宮崎合同）に参加
- 11/14 特別天然記念物ニホンカモシカ調査に関わる3県合同会議に会員参加
- 6月～11月 随時、依頼に応じて講師を派遣した
- 12/8～10 第36回日本ウミガメ会議
美波大会参加



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.58 2026年1月31日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)

代表 岩本 俊孝

<http://www.m-yaseiken.org>



ミサキウマ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。